

146
93
1

新字本
建弘寺藏



詞をへらんとをきひみふ日本法人の心よあひたうり決
又忠いりのちうひを定歌の奇とよむべきやう小如
志との進志うれを舞うところあはれりーきと
まろこ判アー又云和歌よーちやうあー古歌ととの
て跡とすと所産の留ふる記云歌と所おか魚あされひ
てきとくれは信をせおひせ出されへハ被取あれは
まんかしもせんむーれ人れうたをみふくーき
あはあうと高し集とくーめて世このことハとと南世
みふきういカーりともたかくは入るこのまさ海こ
とも詞のつゆけやうーりもわてよくやまことといかさ
やうふとおかせとり被るはちやのゆふともなる同あ
と所ととよひんふるところくとまろてちうあを新く

あそもら進ひりお中定歌りあうろーあひうふひ
ゆやれあちちやれゆもまましくよ志たかりてーや
うあまのくすはむーらわハさわきらひとまきく
あく成修をふと一たんこまうになわりは古まあハた
た詞の志むれみとらわはを大方れうともは入ひはる
うととをゆうはをとくさうひア事おとくは産ん来
うりう奏つときア然よれあハうー一志めと二小部とさ
つゝ祿百のむとあーアはうわなうーうまとれあとす
こーうりらとる奇い上をよまかんやまし祿た下りうとそこ
とりのままこ下志くりあくと上もそとりのまアりれ
おく強ー入んあまハー一わくふうれことハまたくて
はう船もさうらうまそい志のまはー一まもさうあたし

うよーですすこし細ゆるらん母前くハハとわらわハつ
我こほやうりー又三くめかけとあまこくこくふさ
くまよわかうのゆりあるまーくはさーあませりこと
ハ既業まあそれうーきの功物さこ仕こも少せんあこ
して心よーけられハてまーはさーくさや
と舞らまひ身之にこく流もち流し産はまたてにま
があーいけりるますこーうきつけ中しはまこ
うに本定と中ーことの内産だらんハ表も大風あき
大面あることと流りまらんれも数さめをも海風と物
あつかなるやう小仕事おさよそん又も数目とこ
とにうわてみしわくおへPり内産らんとをり
よとありくーまきやうにPありーん故た花の本

まのこと花をハくわおー出て中を極らんこわし
うと志さくらむこPてしまうーくハああは君ひす
まこくふに揚ともほがまきこPしうをあのら都
ハふ神同面よむめとハ仕らぬ梅さー花とPて一
さよ内産らんき人功物ならてを平人ハらんちやく
まこくーハ一おわのうちおてハもふとらんよ小
ほくまのこはるく志あむとなーて仕へ業ことに
ハ花も物申後のんち内入ハ先年ハ内よ表をま
おわすーよわかもふのあわはまをりひーさらひも
ちねまもあくかあたまゆきこれにわてんふと
なるゆりを思ひあわまたはめも数あめうちうこ
小はしいまうあわてりさきお数おもみんとを

一花ひららふまは六下のもゆるとちか我ハ歌のうられ
歌さくらささえりこらぬよりとまきてハもふみ車乃
あこさきたととをほく祿娘むゆねとまたへさゆる
そかいあるいも山ゆとふりちあわおくハふ咲とわく
つりきとるつりひもとるまへと馬にくらをき本のま
とよりむてはさうなとるはまとわくこれあうひまの
目ほくあくおもちうすゆるさととす祿はくは歌ハ
もふ花もと小つておがの月歌ふと志くまのハあ
と折歌的ハ又もとの志わりのたとあく又もぬこの
もふ花といさ歌ふまはあけわのこまうりさくらもま
面をかあふりめるくともおあくハもあのかげは

やとらんよりと思ひ立ちりまはがま志をむより
よむらありひくの歌つとふとくソひてたすつさた
んらくなとをうんととくまより一は歌者信せさる人
もむれさるまあまといひうわてまふこすハ的ハ音とぬ
まあんまをむりひまをまにうのまゆけハあさより
ちまゆくもあをみて世中れらうあきよりを觀しいつ
くまうまたのこまはも歌もあらんとあもぬみ山れを
くふとつりつ入にあを茶わくれのまを揚とみてハ物
花うわをな歌のつりまをまひも歌まくれはせめ
てハわをれつとえんを衣を花乃以落にそめてこあを
うへま目にいづらまゆりハ花乃袖にぬきつぬんよりと
うふまはたこすへのわうとれりみちま見ゆまおも

くみふふこまふとうちありのめ時むきほもつくまふ
と受てもな織花をちこふ心侍歌のこまふこまふよハ
一うきりおむ祿とて残ハくほまなやうくあ
けともりひあるひハ又ふひあうくあふふとふこ
ひまたさき馬ハうまうまうまはとあれく人たまれ
さくめつうしくめきまらうぬおやう小あさあうり
ふ月面のころハあけく連月目のうけおもみするゆ
き人れうよひをなく水たんとくよせ野山をとうこ
おいひあうやうお仕はくこと本定まそひまた秋ハ
祿にんる月を一志かひうわさやけく面白やうよ祿
季たよおくおとまをさうあきりけくよ葉よと木
ももおきりぬおぬせいよ仕物そんお秋れん人

もわふももわよさうきま事もほ入くともやま乃
い流とりまわ物さひく哀あうてハ秋の本さあそひ
また秋の秋あうきあもあうぬ人をいハたあうほまの
祿さめよんをすまうくこおすへれうりなと思
ひけくけめあう祿たほやうお小いあゆとふおかあ
をあることいとも志くれんおんこ一とおつ
あうりすとす祿はん祿もあうりとすまは又あわなと志
て目うけあうく小むらうく一をまさむく志あ
ゆえ志ととさふ一くまのあやの志きうのい
ふこりるあうまうさてい仕来んまうゆきさを山
しおくやあさうハふつそわつまきたき来ん
もたう遊まうの人ハ袖もらういれ祿さうとわあ

目ねとくろしーしーのうらよふ年をとよお心
ちーてまらまふおかこ志もよきの葉の香のき花すく
記乃ま祢くをと君りさくろりと思ひ夕々まよふ世も
さうぬつかもその此多小たちをひらひよの終祢れき
ぬの袖よとろくたきなとーせ又ゆくそふしめまつ
よひれうぬりしあハありぬわりれりるまハ物くす
よあうはとよま侍候と是なわお志のひこいとほゆん
そ人にしひよきてをまうそぬーをんとけりへおおそ
ありら我人め志けく後ハ世のやましましハりわよふと
ゆきつよひてま人にあや志のられてたちりるふせ
ひぬたハ一あてのたすつとにまうまきなやをれむと思
ふちくろあま志はよこいなわまこあひこいとハとー

丹丸をまひれすへ次おそくそりしけとま祢やれ内
をもりーろやう小修くろいあーまつおと志を月ゆか
のりなるまらいいさきわくハをらねはたてくゆぬとの
わき小たちやすうへ家衣のそてを引又祢やまうちへ
いさふひ入てもいぬうちばをあまをたりひよまらり
もーくうらうけふともくわあへすうちぬすさむさ
ろり上りーまらうをいあうへなうう又下ひかをつ
なりわーととやかくやとまらわてやとんもうちを
くあまう小うめりふとあさううぬふせの思ひや
ふへーお判とほたすくとしさうう人まよひにハ
ようめをー乃ひあハはるはわひにあひあぬらあわ
なまは屋くくわうまぬりとりふーみ秋の葉は子

花と一世りあてぬるともあくまきりきりしをひ
しつ馬忠こゑおぬる音のあくまといとくろりとう
らここよひわらきそはまたつあひみんりぞをが
ほらあくそて乃なきしせきあへぬまこりやうく
月と入るるふま志乃くめのらもとあく涙がそく
ひざわらきちうなく衣く入れとちさひみをとわ
侍ままた祿のゆめ乃面うけをとかふくちるあら
るる後乃朝のていまこといふ茶もよととあしし
らみのこいとハことうらふとあきりてをたきり
らあわをまかりと人のソひあしうわた魚んはら
ことをうく見ぬとハ我よと悔と歌人ようほあいなぬ
とと世中れまいてうくこうある物おれとすあ

らぬ方をうくじよのん成我ハひよくまびをらうひ
志中まむなごなわ志何とよそハあのみわ、れの
云茶をつねぬハニ及くゆ人ハたうひのうこや
じよあきまごまきりそひねあ、あハもを又あ
まわつれあ歌人とこひくして甚なしくなる人をそお
芝祿むとれうて物れけとあまうれ心おなやまひに
とおりハ外ますりふれおわよぬまてうら見のり
すくさうくくすへうさ物なわ
一 發られるりお一せしせつらうひハぬやうよ
仕ゆことうんようよハ發のハ百のむりぬまそんハ
川のふとたけたあくゆうたんは打むるめふおだやう
よ仕ん發のハき神とすり入ひいてうぬハすひ

うれき被——し産んも祿ハ平白のやうよおやまし中
は四季のわりの雑流のつと中ことばは産ふくひもい
ひと同かうするへをい

一 さま——の事

ふ 月乃秋花の表立河——ぬれ 糸被

や 山や風花のたうこほも秋のりみ 同

一 さむいよの河音とね——朝りすみ 同

そ 花咲といそぬうらわそぬりそ 書取

か ろふらとかくあるものか夏木とち 知産

をあ—— 去るそハ花のつらぬ木くとあ—— 同

をうふ 時馬とさ山あぬととふ 同

り 見ゆ人と風とまらうわむさうわ 同

ぬ 秋更ぬ松乃ハうこらときわの勢 同

志 ちちのりみちをぬあさとね——雪乃松 糸被

む 的目もこむはハ花登れこたのうら 同

と 松風とか小お家あねと舞れこへ—— 同

さう 萩歌八月さそ住れ口の夕かすこ 同

いさ 二葉ふちよかり木もいさむあの花 同

よ 揚りくよつらハお入を染つて—— 同

い づめをい津山ハ花の物みくわ—— 同

いうて ともふと秋というてわらう葉乃為紅葉 同

いく みすをのうぬ山いくへ物うすみ 同

いづき ゆきいつき庭あうれもふとを梅 同

こう 花若水や海あうら志か志の海 同

ふとさういふ安さうまーと馬 同

下知 小御前よあついできゆふこそゆき 同

大方は部利きつわい

一 わきれくのうとよく霧夕の心をうけてそとせ

つあひそむきくハぬやううーうとささやうにあそ

そさゆへえい

一 オニのうりあの方を大いこよんとも一白

れうをたけたかくおかやううーあそはさるへく

弟とは大いやくてともまわあてんさい祿んそ祿ー

ては志せんあはふとあーたとめアハは外ハこハ

とん此このかりのよくハ平句のやうよきアハあ

一 而ハハハ内するめまても不仕ハのうとも小

ハ神一紙ちやばやうあむーやうぬたんあそやうと

し出さる詞仕らばくうり小うわ霧夕にハちんたむ

やうめの願なとら産ん

一 てりりも乃事

くまこの志らんさいの志とそいみし史ーすきー

是くわこ乃志とそい志ー志あおーたーふと

けんさいの志とそ志産ゆらんさいのーりてりふ

ともてともとのやーさすん

馬たりーぬらぬたよ乃あうれうふ

うやうれうはてにいちういよそんくわんはーり

てハとまわん

我ハまゝこゝろへし乃々めはを

船ハもやむうひさきしにほむとせて

是とてうらちつひまを

こころ中てくわたげるも中さすゆれと大さやくと
め中成ると中てハ教とくめ中いし採らのりいつ何
れいをもふゆりふふとさきらの云葉少てハ採りゆて
かかぢやとよていもねゆなわかれとそのちあくてを
りゆられする

→ なるせひきういハおほけの事

ゆきよをもすゑと教をすふと付りけあわりと
をまわよたちあひくふとほきんこと

右はほきやうよハくひとて百世一たんきらひは

こゝろまハゆをゆひよなと云るよゆえとほきゆハおほ
へくゆわわお船むまなとほきゆはよくゆ入ふひを
さつふときわうすこよくゆ産ゆ

右これおいおかくゆ入ゆ

→ 右れたうらまわしとゆまきハる

こゝろむとまゆゆハいつまゆふとかくて

ぬ採たなくてさかといいとすする

わうとまわうとあえよゆりすす

あひとも暇くてまうとまわとは不仕ん

庭にけさいろうとふめく咲い

むれふくてい

まつこひほくとわつ採あを暇く

馬となくしていりううこはりやうめまふ
ちこしと踊りしるまふまふのまふ
おつこふハをのうハ風にちよむを
しきいにをわせてあくらふくらん
れあまをかたうかハ不仕い

一 同定のまふれこと

うちむういつこ月とあまふ

秋の葉れあけいてこゆくうもな

一 夕のよのまふれをき一みてせむしをふくあふ
の月とよもかうわい

くまきまをふうめもあうす花とあて

たちささうこまきまれはも

花とくそりうをあうそふ

所き志がよ花山ふきさうらえそひそ

うやうは付らるもん同物あて

花とくそいろとあうそふ

み祿の松ひとり表とやとくおらん

うやうはつけのきたれと右人うと

こひうひとたあうりよて

たれもこあう草うみ一うま

たうつうみ一口はくもらうん

一 夕にいき物植物とあくてかくりとく

こもの中へかきあまふりよ

何れうらまわさるるよまのてねて
これぞ同定整といひゆえ

たらしうれをの歌といらば
そぬけむまほるふれゆえりごとと後

うやうよはけりけたくは

見えつかくれつく

あふひの志月日いつりうらえん

是まよくは入る

みへはうくれつく

風雨そ小柳のおくよふあさき

ほりやうハ何と面白産久人たさるる
そぬうまうとせむとするるうり
はる花のう。

うらやとアうりにふみ人のまを
つうくきう

くのま一なるだうまたくすは
る付くとまよく

とアそれへしふ祇のAは
連志ハあくハこひま

ひのるハおりの人りうてあふ
そ判を極つそんるう

ふとアあうい志んはみへは
うくれは思ふ人の

にてるる一白まやすすは
れ奇歌とはたくひおかく

即産は是ハ鳥のくよそ
は入る

あんと我もふ乃葉
極く夕けあわ

かんさいれ一そそは
これとあわあ

あめふらすはまこやく
けあわたちとま

けられはたちと後
はけあわれるう

を以然もあつたらもと悔ら志とつよも一白乃たり
またらしくくひやうよく人たぬく乃しく仕るる
をかく所産る

ゆきこまればなるみちのこころ

ふと尸のるや上手のまき小おかく所産は古上よれれ
はらん志はハみふく所のつてんゆき尸へくる

物表れ云書

立表 年の内りたちも数ハあゆはる数小よん人た
れあゆは冬の季人仕は

こころ急て あつた言はとし わる水 物松 きて

心むる 昔書れ事成 産 ハは書よりわとまきも数ま

て仕る

あぬうすむじと仕はても軟部にあらぬ又月も志火ふ
となくてよふうすこハつうまのらぬ又のすむ病と
云事ハハん志らういハへた云業乃修くけやう少を
もゆまなわ尸の書 志と物表より末迄も果はて
仕る 祿のひ物表子目いしひと中ハは目こ松を
川々ハハいのちをのふるいしひと仕は わりふ 正
月七日ふく業修ていしひ中ハハ

せつなりつふみきやうたむうこ佛りさ

すいふすく志りこ被ふなくくさ

読書 ゆきる ゆきさゆる ゆきとくゆきさ

へぬと尸てとも数になわ尸ん こそを 物ありあめ

ゆれひま 水ぬる あつて ころら 乃と

か さんかくへぞ 東風 あと馬 白むまこ書てあ
とむまことあこすゆ正月七日うあをむまのせらへこ
て大いりあをむまはらんしゆり人は入る びあ冬
季より咲物少くは産へばはらるせははははははははははは
さるるらるる二月まをこれこはやうふらうらうらうらう

ふ祇登り

ふ祇登りのハあゆの橋はくみ山うふ

うやうよはられはみ山ハさむきゆくあゆおまやうよ
わひてさきげるとあう はん 花をあよなとくす
栞のりゆては 栞 これもくも祇より来たるま
てはうまたはゆい 下へのをさ 心のをせり 本
のめ わかま ぬらわ さわらひ おがり月夜

是もハら ことあよわ来たるまをき すしき きしと仕
てきもゆゆをい 船だの ちり木のたか ぼんをの
たうあく馬うわ 何といふよあつる いかあそよハ
旅れ日うけうちうとくとりる乃やう小みへすは
百子る ふぬこ無ま うかむま やけ燈 萩れ
やけ系 そくられ落 むはな 正月のり成
さかひあ も祇とつうさとり物なわ けうあゆ
のわかれ人よくりんをたまうよとまなわあここの中
のまをりふあわ

申妻れ観

を田うへす 是も正月来たうわ二月まを
花とまり 花にゆゆ 南まはり 八もこあんな志

乃まづと大にせしゆハもあつてふ くれと正月
乃来よりわくれしゆまで仕ゆ うれしき 松乃わりこ
とわ 松若みどわとていふ歌よふも不ふそう魚つ
見とてと一して季とまのりは産なくは唐乃書小ハ
見とて松墓に用は目かあは夏ももは歌よも不用のみ
とわ立松をく歌よそふ松のむ 松よりハ十うへ
しとて花け咲りーりゆ十か歌よとハ十代とうきさ
のハきのらふとつとまきとハるを仕ゆへそしゆり
あつとていふと志あり たるはく 物花 物栲 佛
乃判二月十五日 ころうつ けハめ ひりるむ
まはす やよひ あつとてい ーつとたうりのせらと
て正月十日目のう歌京中のう歌よき人とあつめいろ
ノノ書とあい ーむらりをこれとあつれん ーつと
いふと

来の志

ふり来日 みのひの後 二月上乃見のひ水のうへよ
蓋とうよかへてあつひとふと目本よも志と信つと
よかきよくすい乃あむと三月三日よするなわも
とてともく あつのむむとわ 揚人 さくら田
揚らと けらとと揚事 けくらたひ さくらうへ
うーわりあゆ馬乃ぬ 山ふさき やよひ くらき
物れ夏詞
衣あく 去衣とへて夏乃う歌とあき歌よりふ
時了是ハつとていふとあぬやうり仕あつもしんた

の娘よわな月をそとまつやうよ仕る草小かともくさば
おむしひくくハふつよあわゆる たまはくうはくあ
まゆもな よくふとはわりう葉なをくう花は枝くる
ま尸まきむま小花むまひもふつよなわゆる
わり葉 わか葉とくくわ尸ハ本思ハう葉のみり小
てん草れハう葉をく葉あそく まきつまた まよ
はく葉のたいに入尸まきあはなつなわ かたん
ふつこくさたうつうくもまにハもゆあそく産ゆ
うの葉 りつきとも仕ゆ ふはま立 あ城うひ
て 志けゆ葉あ

中れ夏

史 四月より五月までとまへをり さうまきとる

神い海はるを 平登きへる あ城ひ ひおわれ日い
月八月六日右を左をのハくれまのりま目のみりなわ
さあへ たち葉 あぬら ゆわ わう竹 と手
うまれのたけたたけの子とも仕る 五月あむ じあ
のあめとも甲ゆ めのふ あゆ う船 うり
ひ火ねと仕ゆ う屋わ火 めをうゆ ぼこもうゆ
りの子 とりー のこととりーをうてつこ
とあを 祿らいうわ セみ ひー みしり葉
的産れさ相同あ けをうふ葉たか とやうる さつ
き 末にむ花 魚よれらふりり成
末れ夏
ひむろ くらす ふてーーこ 石のたけとこ

なつ 同一いよひやふ後を發るもよとひとほ
小つと入られは タフが うま あちさい ふむ
ほむもはん 梅阿さ しく 阿さのみあわ揚
の時部何きまくゆくむめあことあなわ ふつ
ふつ川れゆき 同志かほ入きふつ かん ゆう
立 あふき うわむとしくあふきのなふれゆり
うまわりをとく 中 すすしき あつきひ 志ろ
志あといるまハ 夏よあつす づつみ 阿のやし
あ うつの上には やふをいとうて夏神系とする
事あり 後 六月つこも夏は水邊にとういごと
ゆるふつここまわりきくらゆるやうものそのそ
きは八月ふた秋の 秋を ぬ秋 古考ゆな

こぬ秋のいつくれ出 蔭が
むすふらうわの山乃升のえつ
山ののりきわたりすしきたり とらんとあね
ハまここぬりそあね来てふあきとすき冬になわて
蔭ゆれむすぬりとすこあきとよめあふつととあきと
云ふ小まう同され付白入はあはよ目志この世すふ
方に志せふとけを不中あふきあつすなと同定よ成
中へくるうせいあふきいきらい不中風もくわの羽は
ては入なくはさす物よそは又まのり時持中よまひ
もも持中それ小まわり勢よハきいヤこここ
林のう子六月のいさやうあつ 勢ががた くらも
み祿 ころむらふと中こは産るこして産るも

仕らぬ人とも書はせや—みふりろ—の云々
出づるのせうがふとハ菊のうせあきてす—
こととア—ひび—ひび—
—もう志んく物：孫とはふはえねの—
おそろしきくもまかく出づるたかむ—しりとは水波
うきくさなととらん—お—
ゆすしちくたひらんためよ—
六月れりなわ

物のき

秋立 — 萩 — 何と本よそい — 萩あち — 物のき
少てい — 萩 — 萩あちて知天下あきと志よ
も作はるや—は—た—きと—
七夕

河ぬれ何年お—あきハ衣襟りのいと—合み
なたあもたのちとゆそい — 日々志 — 萩あつと — あ
きす— — あきとく — 萩 — 萩 — 萩 —
まく仕ん — つき — 萩 — ひらね — き—
萩 — 方よしび — 人毎 — くれあきのやうよんへん
た—つ—の— — みに志めと云詞とあき小
成—是らハ三月小— — 萩 — 萩 — 三月
小わ— — 萩 — — 萩 —
き— — 萩 — 上同萩萩と仕んハ風の—
あ— — 萩 — 萩 — 萩 —
をせむみするゆん — 萩 — 萩 —
とみふ— — 萩花 — わさ田 — たは—
七月す

目よそんじ ちりまの歌なり ひやん へん
やふ さひあゆ もさを つき茶 つきくこりこ
とね いとゆく あれのいぢめもとららんを
いとの海祿とてぬくろとつふわ すう
こらけつひとつふあれそ大を乃せちゑなり
終日ひめ 七月の事

宇れあき
志のすうけり勢きーのいさやう あせさ
あきにぬさうつー うつうれを定はみしりき
ふき こだのうわ 物嵐 ちんまう ちん
月夜 ほーまひるをつさめしうなるさ
志のひくさ 思ひをさ けた うけつ 物うかた

とち とい ともにくさきとも ともひの月こま
むかへ ねを承りまきこのこまを大いへ奉るは八月十
五日にねおねまをちりく志少をむうひりとに海を
うひとハヤム 物志不 聖山はつれ付 ちつ紅葉
ーい くら 志さ いろ馬 たりい 衣つき
ぬくの着なとと仕ゆ いうとるま のわけ ちや
出れたり ちよ ひと 是をあるこのりあわぬ
たの傍部とりあうりと同りあつーかふとおとわ
うをゆへり 秋よなるやハ 八はあ

来乃秋

うらうら山 きく あきふん ちんや
ちんまき 飛らぎ ちんまきとけいん ちんまき

あゝす よむさすこをふゆ歌
若のか 阿の荒も仕人 かやほく歌
乃かよそ歌を伝ふる あこめめさけ
糸をくてもも 春ね つゆ時節 物時節と仕
てもふゆ少せは おわふとむほひあきの乃くがむと
ひくハあき歌へ成りは 未葉すすち歌
志未葉れらふハ冬とそく葉らなりふと仕人ハ
あきりなわん くれふつゆ くさうき小葉歌
むすひうてもあきふわ 春つき 九月れり
糸の冬
しーくれ ぬねほいししめよわくれのあゆまを仕

なまこれ志い連同家 春 同 たりを 同 さむ
此内 この葉 是と三月よわわ中ハ くらも
此れハ衣 同家 ハつ歌 ころこ すさう海 之
月小わわ中ハ 春ゆこもわ 小葉 三月よわ
こわ中ハ 阿のり 小鳥 神あつき

申冬

あ ふくき ぼくら ころこ ひと
あーばを 水鳥之けよわ中ハ をー同
かと同 みるま あつま くの阿つこ乃せらあ
はせらあゆはそ年ハい糸と神より春をそハ後
きーのー後下路なわ
をこし歌を せらあのまハ人ハある物なわ

目くけれは、目け草と云をとりん、はうくは
とふ、是もそちへりま、い人の乃をぬ

言を冬

神宗 庭火 うくくの河庭火のうり うつみひ

三月よりこ へー わさびめ ぬゆ木の櫛

雲とまの栴をとけん 雲をま ーわを ー

乃うちを敷 と志れくれ 雲一ーりーと

あくろとあふり ーま ーあふりこむ

こはうと志けあーといふ貴とまハをんことりよん

ーれぬ 人うりうくあへひ 恋しく思ふんとり

むゆんすふ心 あふれ 物の長ーさふわ面白

きあくろあつハととらふあくろ うちとがのん

うこはをこ ちうひのり せいもんふのま

たまりを 余のうりあふ 志いしれり成 いと

よよぬ とのりふか た言をかむる詞 しみ

人のり次れこもなわ務をもりひむりぬえと ぞむ

うこれりふさ だうひのこりあわ ふうめ

ぬれこくろ きのこりあわ 志ぬは羽家事

美禁一よーせ心こま事 すすよ ぬゆいよとハぬ

敷ことなる ありあわすさむとはやむこと 風す

さよとハあくことあつり勢ふきすさ世とハやむきふ

みかくれ こへあへあへさなる 水りうく

あくこと うりうく かくとらふん さうきく

人入あのこととらふぬ ーこたてとすふこふ

うーろめふき 心をあはれふら

おとひのひとひとりぬよむきを思ふこと おおもふ

も流れ小をもふらぬを くらつとしし たのひよ

くらつと くらつと ぬうひのくくらふは

なわ あさくら ぬの世にぬ 目をふたじらと

人の乃世き人めまけくて関となる心 まめ男

あんなつれ心もさう

めまらぬ 物づくのこと あさくらけ けさ

のをしはふわ ぬくれ あけけけか くらく

なわことふか又あけくまこと云ハ秋夕れす あこ

あまの あさくらうあさといふこと あこもさの成

あさけ とうあさくらと 物づくひ あこ月あつ

つらひとも けさうら あさあけ はぬらぬ葉よ

くはあさい 物縁のす のこと出 けさうけ出

ことれ けさうら けさうら のす ぬさあり

夕暮 けさうら けさうら けさうら けさうら

月夜 けさうら けさうら けさうら けさうら

ハ山 けさうら けさうら けさうら けさうら

ふされ 山あつら けさうら けさうら けさうら

けの志う けさうら けさうら けさうら けさうら

月十六夜乃月おもハハ たこやまぬ けさうら

ゆめりうきさう けさうら けさうら けさうら

とくふ話も付かへとらふなわ けさうら けさうら

きこなみーん 木葉あめ 是と木葉があの小き
此なーいれハ冬少とらうへ物あわ物きういゆる
まのうせのあめと同あ くさゆるく 猿ふわ
うんこのかあすす くらくらハうへそのあしは
くさどまくらとーせハうへと若もそくは入は くらま
かーつるまくら様少とらうらうめにぬほてい少そ
海産ん くら衣 うそそ月のちやうそくまそか
望する時にきまもれよてん 波まらり たい
にてん ちひなかくてもするものよそんいそを浦さそ
にてふんとききていよてん くらゆるくらふ祿と云
ー飛くてハせぬあわわらわ寄ぬ祿をのけてハせ
ぬことみん たかせふ祿 河船れことぬりせさす

どもするこつ勢ともうわもよねーてひさすらへ
らう志あめあ心なわ の中そくらひ 糸のカーと
け てきていにてん 目ふひさる のわめあ
うるこいたこころこゑ あまわらるこゑ ーれ世
せいたうあれせあそ くらあれ けれこゑあて
は ゆこーしきさ ちせくし候もろ しがすあこ
すうあら たかゆら せーれり いさくの
志もしの事 けあき 能合ぬ といぬる
りり立 ちうらんれりり ことふき同あ つとめそ
あさうくのこことけらめ ちや魚のあこ おさく
志うすそとあーからせ いたあー ちや志きたわ
むへ けあもあこ ー志あえ 後あるとりふこ

とりの人　もんちゆのし　うそりり　ちん
くなわ　後のさや　まじりく　まのそのさ
し　まじりたいれ事　とじりく　花は
こと　えり人　ともとち　ともたち乃こと
家つと　まやきふ　うけりぬあわ　くんふく
のこ　ほくもあ　まじりるあ　のこ
まじりまの若ふ　まじりるあ　まじりるあ
えととおかけてさるまじり　ほくらむ
坂のこ　ちまこ　るけちことれ　たまがこ
えち　ひらうこそが　あめあふ　又俄の
あまを袖をうけていせ　むさめ　重なり
う　まをせぬり　おま　は　き成

船とこ　あひ人成　ちやうしたつ　ふつ人さす
ゆなわ　をとあ　面目ふ　まじり　の
まじり　まじり　まじり　まじり
下とりの　まじり　られん　まじり
うまふきり家のてい　まとの　あんの
てい　まじり　まじり　まじり　まじり
てい　あけりうがぬ　まじり　まじり
あつまや　まじり　まじり　まじり
ほや　まじり　まじり　まじり
へをけるい　まじり　まじり　まじり
まじり　まじり　まじり　まじり

